

日本人 EFL 高校生の語彙力別語彙学習方略と
関連諸要因との比較

A Comparative Study of Vocabulary Learning Strategies and
Their Related Factors between Japanese EFL High School
Students with Different Vocabulary Levels

北 條 礼 子
Reiko HOJO

上越教育大学
Joetsu University of Education

Abstract

The purposes of this study are: 1) to investigate the differences between good and poor Japanese EFL high-school students in vocabulary learning strategies use and their related factors, such as learning style, personality, motivation and gender, and 2) to compare how each vocabulary learning strategy was evoked by the related factors between good and poor learners. Data on the factors mentioned above were gathered from 151 high school students in April of 1999, using a questionnaire consisting of 59 items as a total. The results were as follows: 1) 5 factors were extracted for vocabulary learning strategies, while 2, 5 and 4 factors were extracted for learning style, personality and motivation respectively; 2) 1 vocabulary learning strategy and 3 factors of motivation showed significant difference and tendencies between the two groups, ; 3) use of each vocabulary learning strategy was evoked by a different combination of the related factors.

KEY WORDS

学習方略 learning strategy 学習スタイル learning style
性格特性 personality 語彙学習方略 vocabulary strategy
動機づけ motivation

1. 研究の背景

近年、学習方略の中でも語彙学習方略が注目されるようになってきた。語彙学習方略の重要性については低頻度語が多く存在しかつその使用が限定されていることから、これらの低頻度語を個別に扱うよりむしろこれらの語を学習する方略を学習者に教授することが最善であるとの見解が示されている(Nation, 1990)。また、学習者個人個人によって違いがあることを認めた上で、語彙学習のための方略を学習者に教授する必要性も報告されている(O'Malley & Cha-

mot, 1990; Coardy, 1997)。さらに、語彙学習ばかりでなく語彙学習方略に関する研究に多くの余地が残されていることが指摘されている(Gu & Johnson, 1996)。語彙学習方略の下位分類についてはこれまでいくつか提示されているが、これまでのところGu & Johnson(1996)による下位分類が、総括的なものであると思われる(Yabuki, 2000)。彼らの語彙学習方略の下位分類は、メタ認知方略、推測方略、辞書方略、メモ方略、記憶リハーサル方略、記憶エンコーディング方略、活動方略の7方略である。

次に語彙学習方略に関する実証研究であるが、語彙学習方略の下位分類を明らかにするとともに、各研究によって指標は違うものの、学習者を上位群、下位群に分けて、各群の語彙学習方略の特徴を検討している研究がみられる。まずGu(1994)は、英語を専攻としない中国人の大学3年生 978名の中から、英語の成績の上位者1名、下位者1名を選び、それぞれの語彙学習方略をプロトコル法により調査した。その結果、成績上位者は未知語の意味推測や既知情報との関連など多彩な方略を用いていたのに対して、下位者はほとんどこのような方略を用いていなかったという、成績の違いにより非常に対照的な結果が報告されている。さらにGu & Johnson(1996)は、英語を専攻としない中国人大学生 850名を対象とし、語彙学習方略と語彙学習方略についての信念、語彙サイズ、英語力との関係を調べている。

さて、日本人学習者を対象とした実証研究は最近その数が増えてきているが、まず佐野(1993)は日本人大学生を対象とし教養の英作文クラスの受講者60名のうち、成績上位者、下位者それぞれ6名を選び、成績別の単語の学習法を比較した。その結果、上位者は学習した語を英文の中で積極的に使用することによりおぼえようと努力するのに対して、下位者はあまり努力せず記憶に関する方略をほとんど使用していないことが報告されている。また辻川(1999)は単語の記憶法に関する研究の一環として、中学3年生67名を、単語の保持テストの得点により上位者と下位者に分け、方略使用の違いを調べた。その結果、上位者が単語カードをよく利用していたのに対して、下位者は視覚的イメージによる記憶に頼る傾向を示したことが報告されている。さらにYabuki(2000)は、高校1年生 158名、高校3年生88名を対象とし、その語彙と個人差(動機づけ、性格、学習スタイル、学習経験)、状況的・社会的要因としての性差、語彙レ

ベルとの関係を明らかにしようとした。その結果、語彙学習方略について6因子を抽出し、さらに冒険心、統合的動機づけが語彙学習方略使用を促し、語彙力の上位者ほど方略使用の頻度が高い傾向にあることなどを述べている。最後に、平野(2000)は中学3年生174名を対象者とし、彼らの用いている英語語彙学習方略を分類し、さらに英語学力と性差の影響を論じている。この研究では、「反復・体得重視」、「単語のイメージ化」、「興味・嗜好優先」、「音声反復」の4因子が抽出されている。また、「音声反復」因子において英語学力や性差の影響はみられなかったが、他の3因子については英語学力や性差が影響を及ぼしていることも報告されている。

以上の結果から、学習者の語彙力の違いによって語彙学習方略使用の状況が異なることがうかがえる。しかし将来、学習者の個人差を考慮した上で語彙学習方略を実際に指導していくことを念頭におくと、語彙力の異なる学習者がどのような語彙学習方略を用いているのか、さらにその語彙学習方略が関連諸要因(個人差や性差)がどのようにかかわっているのかを検討しておくことは必要であろう。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人EFL学習者(高校生)が用いている語彙学習方略と関連諸要因は英語の語彙力別により違いがあるのかどうかを明らかにすることである。第二の目的は英語の語彙力別にみると語彙学習方略の使用を喚起するのはどの関連諸要因であるのかを明らかにすることである。なお、ここでいう語彙学習方略関連諸要因とはEllis(1996)のモデルを基にして選び出した要因である。

3. 研究の方法

3.1 対象者：新潟県内の公立高校3年生151名

3.2 測定具：計59項目から成る5段階尺度形式のアンケート。内訳は、①英語の語彙学習方略に関する30項目、②英語の学習スタイルに関する6項目、③性格特性に関する15項目、④英語学習の動機づけに関する8項目である。また調査実施校から語彙テストの得点が得られた。ここでの語彙学習方略の調査項目は、Rubin and Thompson(1994)の紹介している語彙学習方略を基にした17

項目と矢吹(1999)の語彙学習方略に関する調査結果から日本人学習者がよく用いていることがわかった13項目を加えた計30項目である。前者については、筆者が日本語になおし、調査協力校の教諭の助言を得て、高校生の現状に適するように、日本語の表現等を一部修正した。

3.3 調査実施時期：1999年4月

3.4 手続き：約15分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は①については「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階で、②から④については「1.まったくそう思わない、2.どちらかというと思わない、3.どちらでもない、4.どちらかというと思う、5.まったくそう思う」の5段階で、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析、回帰分析、分散分析

4. 研究の結果

4.1 語彙学習方略

4.1.1 平均値・標準偏差

日本人EFL高校生が用いている語彙学習方略に関する30項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目について対象者全体と語彙力別の平均と標準偏差を示したものである。以上の30項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目8の質問項目を、天井効果が生じたものと判断し、また項目23、25の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、以上の計3項目は因子分析に持ち込まなかった。

次に、日本人EFL高校生が用いている語彙学習方略関連諸要因である学習スタイル6項目、性格特性15項目、動機づけ8項目の計29項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表2は各項目の対象者全体と語彙力別の平均と標準偏差を示したものである。

表 1 : 語彙学習方略の平均値と標準偏差 (N=151)

項目	全体 : N=151		上位群 : N=76		下位群 : N=75	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D
1	4.05	0.79	4.09	0.77	4.00	0.82
2	3.72	1.20	3.62	1.31	3.83	1.08
3	3.30	1.17	3.20	1.14	3.41	1.20
4	3.72	1.00	3.84	0.99	3.60	1.00
5	2.65	1.09	2.74	1.00	2.56	1.18
6	2.89	1.18	2.91	1.16	2.88	1.21
7	3.05	1.17	3.21	1.13	2.88	1.20
8 [△]	4.10	1.09	4.05	1.13	4.15	1.05
9	2.32	1.02	2.45	1.08	2.20	0.96
10	2.35	1.03	2.54	1.05	2.16	0.97
11	3.00	1.05	3.11	0.97	2.89	1.12
12	2.87	1.03	2.83	1.04	2.91	1.03
13	3.21	1.09	3.22	1.15	3.20	1.04
14	2.95	1.24	2.82	1.22	3.09	1.25
15	2.72	1.04	2.78	1.05	2.65	1.03
16	3.76	0.93	3.62	1.02	3.91	0.81
17	3.36	1.18	3.45	1.23	3.27	1.13
18	2.28	0.87	2.24	0.81	2.32	0.93
19	2.70	1.13	2.61	1.10	2.79	1.17
20	3.46	0.94	3.54	0.97	3.39	0.91
21	2.88	1.03	3.03	1.08	2.73	0.96
22	3.22	1.26	3.30	1.14	3.13	1.39
23 [▽]	1.73	0.89	1.75	0.92	1.71	0.85
24	2.32	0.98	2.34	0.99	2.27	0.98
25 [▽]	1.78	0.94	1.79	0.94	1.77	0.94
26	2.18	1.01	2.14	0.95	2.21	1.07
27	2.48	1.15	2.54	1.17	2.43	1.13
28	2.34	1.06	2.43	1.06	2.24	1.05
29	2.78	1.17	2.99	1.13	2.57	1.18
30	2.66	1.21	2.88	1.21	2.44	1.18

△ 天井効果を示した項目、▽ フロア効果を示した項目

以上の学習スタイル 6 項目、性格特性 15 項目、動機づけ 8 項目の計 29 項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲 (1-5) を越えた、性格特性の項目 2 を天井効果が生じたものと判断し、また動機づけの項目 7 の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、以上の 2 項目は因子分析から除外した。

表 2 : 語彙学習方略の関連諸要因の平均値と標準偏差 (N=151)

項目		全体 : N=151		上位群 : N=76		下位群 : N=75	
		平均	S D	平均	S D	平均	S D
学習 スタイル	1	2.81	1.20	2.66	1.18	2.96	1.21
	2	3.05	1.06	3.24	1.02	2.87	1.07
	3	3.02	1.23	3.21	1.13	2.83	1.31
	4	3.23	1.01	3.17	0.99	3.29	1.04
	5	3.05	1.02	3.17	0.90	2.92	1.11
	6	3.30	0.93	3.38	0.98	3.23	0.88
性 格 特 性	1	2.60	1.13	2.59	1.04	2.60	1.22
	2 [△]	4.19	0.87	4.09	0.85	4.28	0.89
	3	2.56	0.88	2.62	0.83	2.51	0.92
	4	3.60	1.21	3.59	1.18	3.60	1.24
	5	2.91	1.15	2.95	1.12	2.88	1.19
	6	2.78	1.10	2.84	1.05	2.72	1.16
	7	3.25	1.34	3.33	1.29	3.16	1.39
	8	3.11	1.14	3.20	1.06	3.01	1.22
	9	3.14	1.22	3.16	1.17	3.12	1.28
	10	2.72	1.22	2.78	1.16	2.65	1.29
	11	2.76	1.00	2.80	0.97	2.72	1.03
	12	1.99	0.94	2.05	0.89	1.93	0.99
	13	3.26	1.27	3.33	1.22	3.19	1.33
	14	3.05	1.30	3.24	1.26	2.85	1.32
	15	2.61	1.13	2.64	1.05	2.57	1.21
動 機 づ け	1	3.25	1.18	3.07	1.24	3.43	1.09
	2	3.54	1.16	3.35	1.22	3.72	1.07
	3	3.36	1.11	3.43	1.09	3.30	1.13
	4	3.26	1.08	3.21	1.09	3.32	1.07
	5	3.80	1.13	3.55	1.18	4.05	1.01
	6	3.26	1.13	3.01	1.09	3.52	1.12
	7 [▽]	2.08	1.11	1.89	1.03	2.27	1.17
	8	2.11	1.09	1.91	0.98	2.32	1.16

[△] 天井効果を示した項目、[▽] フロア効果を示した項目

4.1.2 因子分析結果

語彙学習方略とその関連諸要因について天井効果、あるいはフロア効果を示した項目を除いて因子分析を実施した。詳細は、北條（2000、発行予定）で報告しているが、語彙学習方略と関連諸要因について因子分析を実施した結果、以下のように命名した各因子が抽出された。なお、カッコ内に示したのは、各因子に含まれた項目番号である。

語彙学習方略：因子Ⅰ「記憶術利用」(項目27, 29, 26, 24, 28, 10)
 因子Ⅱ「選択的単語暗記」(項目4, 20, 3, 16)
 因子Ⅲ「英文利用暗記」(項目11, 21, 12)
 因子Ⅳ「既知情報利用」(項目7, 15, 5)
 因子Ⅴ「反復・意味調べ」(項目17, 1)
 学習スタイル：因子Ⅰ「視聴覚型」(項目1, 2, 3, 5)
 因子Ⅱ「体験型」(項目4, 6)
 性格特性：因子Ⅰ「冒険心」(項目6, 1, 9)
 因子Ⅱ「自尊心」(項目11, 3)
 因子Ⅲ「社交性」(項目8, 15, 5)
 因子Ⅳ「権威主義」(項目10, 14)
 因子Ⅴ「あいまい性への耐性」(7, 13)
 動機づけ：因子Ⅰ「統合的動機づけ」(項目2, 1)
 因子Ⅱ「成績向上意識」(項目5, 6)
 因子Ⅲ「道具的動機づけ」(項目4, 3)
 因子Ⅳ「プライドの充足」(項目8)

4.2 語彙力別による語彙学習方略と関連諸要因の各因子の比較について

4.2.1 平均値・標準偏差(因子標準得点)

語彙力による語彙学習方略と関連諸要因の各因子の因子標準得点の平均と標準偏差は表3のとおりである。

表3：語彙力別による語彙学習方略と関連諸要因各因子の平均、SD

因子	上位群：N=76		下位群(N=75)	
	平均	SD	平均	SD
語彙学習方略因子Ⅰ「記憶術利用」	0.10	0.94	-0.10	0.87
語彙学習方略因子Ⅱ「選択的単語暗記」	-0.05	0.93	0.05	0.85
語彙学習方略因子Ⅲ「英文利用暗記」	0.00	0.85	-0.00	0.87
語彙学習方略因子Ⅳ「既知情報利用」	0.02	0.74	-0.02	0.88
語彙学習方略因子Ⅴ「反復・意味調べ」	0.13	0.80	-0.13	0.80
学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」	0.12	0.89	-0.12	1.09
学習スタイル因子Ⅱ「体験型」	-0.01	1.03	0.01	0.98
性格特性因子Ⅰ「冒険心」	0.02	0.93	-0.02	1.07
性格特性因子Ⅱ「自尊心」	0.07	0.93	-0.07	1.06
性格特性因子Ⅲ「社交性」	0.06	0.98	-0.06	1.02
性格特性因子Ⅳ「権威主義」	0.07	1.01	-0.07	1.00
性格特性因子Ⅴ「あいまい性への耐性」	0.07	0.97	-0.07	1.03
動機づけ因子Ⅰ「統合的動機づけ」	0.15	0.91	-0.15	1.07
動機づけ因子Ⅱ「成績向上意識」	-0.21	1.00	0.21	0.96
動機づけ因子Ⅲ「道具的動機づけ」	0.05	1.02	-0.05	0.98
動機づけ因子Ⅳ「プライドの充足」	-0.15	0.85	0.16	1.11

次に、各因子につき語彙力の上位、下位群別に分散分析を行った結果は以下の表4に示すとおりである。

表4から、語彙学習方略の因子V「反復・意味調べ」のみにおいて上位群が下位群より方略使用が多いことがわかった。また、学習スタイル、性格特性の各因子について上位群、下位群による有意な差はみられなかった。しかし、動機づけについては、上位群は下位群より強い統合的動機づけがある傾向を示している一方で、下位群は上位群に比べて「成績向上意識」が強く、「プライドの充足」については強い傾向があることが示された。

表4：語彙学習方略と関連諸要因各因子の語彙力別分散分析結果

	F (1, 149)	p	上位	下位
語彙学習方略因子Ⅰ「記憶術利用」	1.95	ns		
語彙学習方略因子Ⅱ「選択的単語暗記」	0.46	ns		
語彙学習方略因子Ⅲ「英文利用暗記」	0.00	ns		
語彙学習方略因子Ⅳ「既知情報利用」	0.13	ns		
語彙学習方略因子Ⅴ「反復・意味調べ」	3.94	*		>
学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」	2.31	ns		
学習スタイル因子Ⅱ「体験型」	0.03	ns		
性格特性因子Ⅰ「冒険心」	0.08	ns		
性格特性因子Ⅱ「自尊心」	0.66	ns		
性格特性因子Ⅲ「社交性」	0.53	ns		
性格特性因子Ⅳ「権威主義」	0.67	ns		
性格特性因子Ⅴ「あいまい性への耐性」	0.67	ns		
動機づけ因子Ⅰ「統合的動機づけ」	3.35	+		>
動機づけ因子Ⅱ「成績向上意識」	6.99	**		<
動機づけ因子Ⅲ「道具的動機づけ」	0.45	ns		
動機づけ因子Ⅳ「プライドの充足」	3.73	+		<

+ .05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01

4.3 語彙力別の語彙学習方略と関連諸要因の関係

調査協力校から得られた語彙テストの得点を基に、14点以上の76名を上位群、13点以下の75名を下位群とした。この上位群、下位群を性別で分けた各因子標準得点の平均と標準偏差は表5に示すとおりである。その上で上位群、下位群別に語彙学習方略得点（標準因子得点）を目的変数とし、学習スタイル2因子、性格特性5因子、動機づけ4因子（各標準因子得点）、性差を予測変数としたフォワ

ード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。

表5：語彙力別語彙学習方略と関連諸要因各因子標準得点の平均、SD

因子		上位群男子 N=30		上位群女子 N=46		下位群男子 N=26		下位群女子 N=49	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
語彙方略	I：記憶術	0.03	1.09	0.15	0.83	-0.21	1.03	-0.05	0.78
	II：選択的	-0.15	0.99	0.02	0.89	-0.10	0.98	0.13	0.76
	III：英文	-0.19	0.66	0.13	0.94	0.24	0.93	-0.13	0.82
	IV：情報	0.05	0.87	0.01	0.65	0.03	0.99	-0.05	0.82
	V：意味	0.07	0.94	0.17	0.71	-0.14	0.95	-0.13	0.72
スタイル	I：視聴覚型	0.08	1.11	0.15	0.73	-0.28	1.08	-0.04	1.10
	II：体験型	-0.08	1.24	0.03	0.87	0.13	1.02	-0.05	0.96
性格特性	I：冒険心	0.09	0.97	-0.02	0.92	0.43	1.05	-0.27	1.01
	II：自尊心	0.21	1.05	-0.03	0.85	0.09	1.30	-0.15	0.92
	III：社交性	0.26	1.07	-0.07	0.90	0.01	0.80	-0.10	1.13
	IV：権威	0.05	1.15	0.08	0.92	0.12	1.08	-0.17	0.95
	V：アイマイ性	0.17	1.08	-0.00	0.90	-0.13	1.23	-0.03	0.92
動機づけ	I：統合的	0.01	1.09	0.24	0.77	-0.58	1.01	0.08	1.04
	II：成績	-0.34	1.05	-0.12	0.97	0.33	1.03	0.15	0.93
	III：動具的	-0.02	1.28	0.10	0.83	-0.00	0.96	-0.08	1.00
	IV：プライド	-0.25	0.99	-0.09	0.75	0.48	1.19	-0.01	1.04

4.3.1 上位群の回帰分析結果

表6：上位群の語彙学習方略5因子を目的変数とした回帰分析結果

目的変数	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F	p
I：記憶術利用	統合的動機づけ	0.117	0.117	0.34	9.83	**
II：選択的単語暗記	道具的動機づけ	0.065	0.065	0.29	5.13	*
III：英文利用暗記	プライドの充足	0.060	0.060	0.22	4.69	*
IV：既知情報利用	冒険心	0.073	0.073	0.23	5.85	*
	視聴覚型	0.054	0.127	0.20	4.39	*
V：反復・意味調べ	プライドの充足	0.079	0.079	0.19	6.32	*

** p<.01 * p<.05

語彙力の上位群に関する回帰分析を行い、有意水準5%で語彙学

習方略の各因子を喚起する因子を選出したが、その結果をまとめたものが以下の表6である。

表6から、「記憶術利用」因子は「統合的動機づけ」に喚起されることが示唆された。「選択的単語暗記」因子は「プライドの充足」に喚起され、「英文利用暗記」因子は「道具的動機づけ」に喚起されることが示唆された。さらに「既知情報利用」因子は「冒険心」と「視聴覚型」に喚起され、「反復・意味調べ」因子は「プライドの充足」に喚起されることが示唆された。

語彙力の下位群に関する回帰分析を行い、有意水準5%で語彙方略の各因子を喚起する因子を選出したが、その結果をまとめたものが以下の表7である。

表7から、「記憶術利用」因子は「視聴覚型」と「自尊心」に喚起されることが示唆された。語彙学習方略因子II「選択的単語暗記」を目的変数とした回帰分析の結果、5%レベルで選出された因子はなかった。「英文利用暗記」因子は「自尊心」と「成績向上意識」に喚起されることが示された。「既知情報利用」因子は「冒険心」と「社交性」に喚起されることが示唆された。「反復・意味調べ」因子は「自尊心」に喚起されることが示された。

表7：下位群の語彙学習方略5因子を目的変数とした回帰分析結果

目的変数	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F	p
I：記憶術利用	視聴覚型	0.152	0.152	0.20	13.05	**
	自尊心	0.068	0.220	0.19	6.29	*
II：選択的単語暗記	なし					
III：英文利用暗記	自尊心	0.133	0.133	0.27	11.19	**
	成績向上意識	0.068	0.201	0.20	6.15	*
IV：既知情報利用	冒険心	0.091	0.091	0.26	7.33	**
	社交性	0.087	0.178	0.21	7.60	**
V：反復・意味調べ	自尊心	0.052	0.052	-0.20	4.01	*

** p<.01 * p<.05

4.3.3 語彙力別語彙学習方略5因子と関連諸要因の関係の比較

語彙力の上位群と下位群別の語彙学習方略5因子と関連諸要因の関係を比較した結果は表8のとおりである。

表 8 : 上位、下位群別語彙学習方略5因子と関連諸要因の関係の比較

語彙学習方略因	1%、5%レベルで選出された関連因子	
	上位群	下位群
I : 記憶術利用	統合的動機づけ 道具的動機づけ プライドの充足 冒険心 プライドの充足	視聴覚型、自尊心 なし 自尊心、成績向上意識 社交性、冒険心 自尊心
II : 選択的単語暗記		
III : 英文利用暗記		
IV : 既知情報利用		
V : 反復・意味調べ		

5. 考察

5.1 語彙学習方略と関連諸要因の語彙力別比較について

まず、本研究の結果からわかったことをまとめると、第一に対象者となった日本人EFL学習者（高校生）の語彙力上位者は「反復・意味調べ」因子を下位者より有意に多く用いていることがわかった。この因子はその使用頻度を示す平均をみると、3.36～4.05の範囲にあり学習者使用頻度が比較的高い方略である。この「反復・意味調べ」因子について、これまでに筆者が行った調査から高校生はボトムアップ式の学習方略を用いていることがわかっている（北條、1999）が、今回の調査から特に語彙力が高い学習者にその傾向が強いことが改めて確かめられたといえよう。この結果は納得のいく結果であると考えられるが、高校生が単語や英文を中心として学習している以上、その結果が語彙力の向上に結びついたものであると推測される。

次に学習スタイル、性格特性については有意な差はなかった。しかし、英語学習に対する動機づけのうち、上位者は有意に統合的動機づけが強い傾向にあり、その一方下位者は成績を上位者より有意に強く意識し、プライドも上位者より強い傾向があることがわかった。また、Yabuki(2000)は高校生の語彙学習方略の使用を促す因子として統合的動機づけをあげているが、筆者も同様な結果を得ている（北條、1999）。この研究において高校生の学習方略使用を促す因子として、統合的動機づけが抽出されている。このことから、少なくとも高校生の英語学習を促す要因として、統合的動機づけが存在していることが指摘できる。しかし、語彙力が低い学習者が語彙力が高い学習者と比べて、英語の成績を意識し、自分のプライドを重

視していたことは興味深い。

5.2 語彙力別の語彙学習方略と関連諸要因の関係について

語彙学習方略の使用を喚起する関連諸要因であるが、全体的にみると、語彙力の上位群が語彙学習方略の使用を動機づけの各因子に促されているのに対して、下位群は主に視聴覚型学習スタイルや自尊心、冒険心によってその使用が喚起されているのが特徴的である。

さてここで語彙学習方略各因子を一つずつみていくことにする。まず「記憶術利用」因子であるが、この因子に含まれていた項目の平均をみると、2.18～2.78を推移しており、どちらかというの使用頻度が低い方略であると考えられる。この方略に対して語彙力の上位群は統合的動機づけによりこの因子の使用を喚起され、その説明率は単独で11.7%を示していた。しかし語彙力の下位群は、視聴覚型の説明率が単独で15.2%を示し、さらにこの視聴覚型と自尊心による累積説明率は20.1%であった。佐野(1993)は、日本人大学生を対象とし、彼らの単語の学習方法を他国の学習者と比較しその結果を2点にまとめている。それは、1)上位者、下位者ともに似たパターンを示し、勉強方法に工夫が足りないと思われること、2)上位者、下位者ともに、効果的に記憶する工夫や情緒をコントロールする工夫に劣っているというものである。今回の調査結果もこの佐野の結果を裏付けるものであったと考えられる。また、この結果のうち、語彙力の下位群が視聴覚型に喚起される傾向を示していたことは、辻川(1999)の研究結果を支持するものであった。辻川は語彙力の低い中学生が視覚的記憶に頼る傾向があるという結果を報告しているが、今回の調査結果と併せて考えると、日本人EFL学習者は高校生になっても同様の傾向を示すものと推察される。

次に、「選択的単語暗記」因子は学習者自ら単語を選択するのではなく、教師がおぼえるようにと指示した単語をおぼえるといういわば受動的な学習内容であるが、平均は3.30～3.76の範囲にあり、どちらかというに使われている方略である。この方略使用は上位群が道具的動機づけによりその使用を喚起されるのに対して、下位群は喚起される因子がなかった。この方略は英語学習に対して消極的な態度を示すものであるが、それでも語彙力の上位者が動機づけにその使用を促されていることが興味深い。

また、「英文利用暗記」因子は英文と一緒に単語をおぼえるとい

う内容であるが、平均は2.87~3.00を示しており、どちらかという
と使用頻度は高くない方略である。この方略の使用を促す因子とし
て上位群はプライドの充足が6%の説明率を示したの対して、下位
群は自尊心が単独で13.3%の説明率を示し、さらにこの自尊心と成
績向上意識による累積説明率が20.1%を示した。ここから上位群の
学習者はプライドを充足させるために英文を利用して語彙を暗記し
ようとする場合がないではないが、下位群の学習者は自分の自尊心
を満たすため、そして成績を向上させようという気持ちもプラスに
働いてこの方略を用いる傾向があることが推測される。

「既知情報利用」因子は単語をおぼえるとき、既に知っているス
ペリングや発音と結びつけたり、意味を推測してみるという内容で
あるが、平均は2.65~3.05の範囲内にあったことから、使用頻度は
どちらかというと高くない方略であることがわかった。この因子の
使用を促す因子として、上位群の場合冒険心と視聴覚型が、下位群
は冒険心と社交性が抽出された。特に下位群の社交性は単独の説明
率が17.8%を示していた。両群とも冒険心に喚起されていることか
ら、この因子については語彙力の違いによる方略使用の差はないと
思われる。間違いを犯しても挑戦してみるという気持ちが、既知情
報の利用に結びついていると推測されるが、ある程度納得のいく結
果であると思われる。

最後に、「反復・意味調べ」方略は単語を何度も繰り返しておぼ
えよう（平均は4.05）としたり、わからない単語の意味は調べる
（平均は3.36）という内容であり、学習者が用いていると考えられ
る方略である。この因子の使用を促す因子として、上位群において
はプライドの充足が7.9%の説明率を示し、ここからプライドを充
足させるためにこの方略を用いることがあるという傾向を示した。
一方下位群は自尊心が5.2%というあまり高くない説明率ながら回
帰係数がマイナスの方向を示した。ここから語彙力が低い学習者は
自尊心が低くどちらかという淡々とこの方略を用いる傾向がある
ものと考えられる。

以上のうち、上位群についていえば、「記憶術利用」因子の使用
を促す因子として統合的動機づけが単独で10%を越えていた。また
下位群については、「記憶術利用」因子を視聴覚型が15.2%、「英
文利用暗記」を自尊心が13.3%の説明率でそれぞれ単独でその使用
を喚起していた。以上の語彙学習方略はどちらかという、使用頻

度は低いものであり、そのことから語彙学習方略使用を促すものとして他の要因の存在が考えられる。

最後に本研究において性差については、語彙学習方略の使用に関連していなかった。今回の調査からだけでは明らかではないが、性差より語彙力の違いの方が影響が大きいかもしれない。この点についてはさらに検討が必要である。

参考文献

- Anezaki, T. 姉崎達夫 1999. 「日本人EFL学習者における読解方略における一考察」 研究論集 第14号 上越教育大学大学院教育研究科言語系コース発行 19-34.
- Coardy, J. 1997. L2 Vocabulary Acquisition: A Synthesis of the Research. In Coardy, J. and Huckin, T. (Eds.), Second Language Vocabulary Acquisition, 271-290. Cambridge University Press.
- Cohen, A. D. 1998. Strategies in Learning and Using a Second Language. Longman.
- Ellis, R. 1996. The Study of Second Language Acquisition (2nd ed.) Oxford University Press.
- Gu, Y. 1994. Vocabulary Learning Strategies of Good and Poor Chinese EFL Learners. Paper Presented at TESOL '94, Baltimore. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 370 411)
- _____ and Johnson, R. K. 1996. Vocabulary Learning Strategies and Language Learning Outcomes. Language Learning, 46, 4, 643-679.
- Hirano, K. 平野網枝 2000. 「日本人EFL中学生の英語語彙学習方略—英語学力と性差の影響—」 上越教育大学研究紀要 第19巻 第2号 719-730.
- Hoyo, R. 北條 礼子. 1999. 「日本人学習者の言語(国語・英語)学習における学習方略のモデル構築に関する研究」 平成9・10年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書 2000(発行予定). 「日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究(9): 語彙学習方略と関連諸要因の関係について」 上越教育大学研究紀要 第20巻 第1号
- Horino, M. and Ishikawa, S. 堀野緑、市川伸一 1997. 「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」 教育心理学研究 第45巻 140-147.
- Nation, P. 1990. Teaching and Learning Vocabulary. Heinle and Heinle.
- O'Malley, J. M. and Chamot, A. U. 1990. Learning Strategies in Second Language Acquisition. Cambridge University Press.
- Oxford, R. and Scarcella, R. C. 1994. Second Language Vocabulary Learning among Adults: State of Art in Vocabulary Instruction. System, 22, 2, 231-243.
- Rubin, J. and Thompson, I. 1994. How to Be a More Successful Language Learner (2nd ed.). Heinle and Heinle.
- Sano, M. 佐野正之 1993. 「語彙を定着させるには?—中学校レベルの場合」 現代英語教育 3月号、8-10.

- Tsujikawa, Y. 辻川 陽子. 1999. 「第2言語の語彙学習におけるグルーピングの効果に関する一考察」 研究論集 第14号 上越教育大学大学院教育研究科言語系コース発行 19-34.
- Yabuki, Y. 矢吹 洋子. 1999. 「日本人高校生の英語語彙学習方略に関する研究(1)」 関東甲信越英語教育学会第23回山梨研究大会要項 17.

2000. A Study of the Correlations of Learner Characteristics and Vocabulary Level with Vocabulary Learning Strategies of Japanese EFL High School Students. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.